

小特集  
東西の善政論と君主鑑  
趣旨説明

踊 共 二

この小特集は2023年11月24日に武蔵大学東西文化融合史研究会（東西研）の第5回例会で行われた研究報告および二つの応答的なコメントの内容を増補し、論文化したものである。共通テーマは「東アジアの近代と脱近代」であり、研究報告を行ったのは中国から招いたゲスト、聶菲璘（ニエ・フェイリン）氏である。聶氏は唐代に編まれた『群書治要』の専門家である。『群書治要』は『論語』『老子』『史記』『漢書』などの古典から善き統治の指針になる章句を集めたアンソロジーである。この書物は遣唐使によって奈良時代の日本に伝来し、その後の日本の政治思想、善政論に深遠な影響を及ぼした。ところが中国では早い段階で散逸して忘れられ、江戸時代中期（清代中期）以降に日本から中国へ伝え戻されることになる。そうして復元され、いまや一般向けの普及版も作られている『群書治要』は、現代中国において多くの人々の注目を集めるに至っている。この現象は中国が現代化（近代化）の過程で切り捨ててきた伝統思想の再評価を進めていることと無関係ではない。聶氏自身、『群書治要』には現代中国の政治のあり方（腐敗を含む）を正す役割があると考えている。

上述の東西研の例会では、聶氏の報告の後、伊東貴之氏（国際日本文化研究センター教授）と皆川卓氏（法政大学教授／研究会開催当時は山梨大学教授）が前近代の中国・日本・ヨーロッパの善政論、君主鑑、統治の哲学を比較する詳細なコメントを行い、いわば三角測量的な視点の議論を行った。三つの地域それぞれの特質、共通性や差異については、訳者による解説を含め、この小特集を構成する諸論考によって詳しく知ることができるであろう。以下、それらの論考のタイトルを記しておく。

聶菲璘（安藤潤一郎訳）「『群書治要』——古き「治世の宝典」の伝播と承継」

安藤潤一郎「訳者解説——現代の中国における『群書治要』の「活用」とその背景」

伊東貴之「伝統中国の政治思想と日本——古代から近世まで／比較史的・比較思想的考察」

皆川卓「ヨーロッパの君主鑑——散逸・発見・再利用の背景」

